旅の思い出 初めて飛行機に乗った日

～屋久島紀行 お盆がくると思い出す～

立石 健一

あの時の四人のうち、すでに二人は黄泉の国へ旅立ってしまった。

五十年前の夏。お盆休みに学生時代の友人四人で、就職先の各地から鹿児島港に集合して屋久島行きの船に乗った。九州最高峰の山 宮之浦岳登山が目的だった。誰が言い出しっぺだったのか。その頃特別に山登りが好きというわけではなかったと思うのだが、日頃の息苦しい新入社員の身を暫し忘れて、つい何ヶ月前まで 一緒に遊び呆け、悪さをしまくった仲間との旅は解放感で心躍るものがあった。きっと〝秘境 と呼ばれるような遠くへ行きたかったのだと思う。その頃の屋久島はまだ観光開発などされておらず、周囲にもこの島のことを知る人など居なかった。

いまの時代なら、屋久島まで飛行機にヒョイと乗れば着くが、その頃大卒の初任給が二万円に届かず、大阪―鹿児島の片道航空運賃が八千円くらいしたから、いくら賞与を貰ったあととはいえ飛行機なんて、まさに雲の上の乗り物だった。ましてや屋久島までなんて考えもしなかった。鹿児島へ行くのも寝台ではない急行の夜行列車だった。

屋久島へ行く船は案内書に依れば七時間近くかかると書かれていたが、それまで船旅などしたことがないし、予想していたより、はるかに大きく立派な外観の客船だった。乗船してみると喫茶ルームはあるし、卓球台、ビリヤード台を備えた娯楽室まであるではないか。いくら三等船室の客であっても、これ等を使ってもかまわないわけだから、すっかり嬉しくなって、この部屋に誰もいないことを不思議にも思わず、早速ビールを頼んで卓球をやって燥いでいた。ところが、ものの一時間も経ったのだろうか…。船が大揺れに揺れ出した。港を出て外洋に出たからなのだが我々にそんな知識の持ち合せがあるわけがない。立ってなど居られないから慌てて三等船室へ戻ると、お客の全員がそれぞれ床に毛布など敷いて荷物を枕に横になっている、もはや我々が割り込むスペースがないではないか。さあ、それからの五時間ほどの苦しかったこと。飲んだビールも悪かった。三等船室（これは船底になるのだ）の窓に打ちつけ砕ける波浪を恨めしく眺めながら、何度も喉元までこみ上げて来る吐気に必死で耐えた。港に着いた時には心底ほっとしたが帰りもこの船に乗るのかと思うとゾッとした。

宮之浦港近くの民宿風の旅館は親切だった。夕食に、一人に 一匹、全長が30 cm はあろうかという茹で立ての伊勢海老が大皿に出てきてびっくりした。見るのも 喰うのもはじめて。我々があまりにも感激するものだから、おカミさんは 帰りも泊まるんじゃろ。オガクズに入れたら丸 一日くらいなら生きとるけぇ。漁師さんに頼んどいてあげようか」と言う。「一匹いくらしますか？」そうねぇ、このくらいのので七百円というところかな」

大阪までは二日かかるから断念した。

翌朝、夜明けを待って出発した登山は、雨が多い島と聞いていたが晴天に恵まれ快調そのものだった。山の中は、まったくの無人で他のグループに出会うこともなかったが登山地図は持っていたし、とにかく急流の川沿いに行けば良いわけだ。それに屋久杉を運ぶ営林署のトロッコ線路が、ところどころで見えるから道に迷う心配はなかった。深い山の空気を吸って木漏れ日を浴びながら歩を進めていると頭上で鳥たちが、うるさく鳴き、生い茂った巨木の屋久杉の枝には猿の群れが運動会でもしているようだった。私達は、この大自然の景観に十分満足した。

その日、私達は頂上近くの山小屋に泊まった。ここで京都から来た薬学部の男子学生 一行と相部屋になった。研究用の「屋久笹」を採集

に来ているのだと言う。すぐに仲良くなって食事のあとは小屋の庭で焚火」を楽しんだりハーモニカの伴奏で歌ったりした。

翌日は夜明け前に小屋を出立して高山植物のお花畑の中を頂上に登り御来光を拝み、あとは下山するだけだった。

学生一行十二人は刈り取った笹の葉が大量だから営林署のトロッコで下山する手筈になっていると言う。これは好都合とばかり、笹の葉をその場所まで運ぶのを手伝う代わりに我々も便乗を頼んだ。

このトロッコ、登る時は、箱車何台かを連結して機関車が引っ張るのだが、下山の時には箱車一台ずつを切り離して動力は引力まかせになる代物だった。箱型の荷台の前方に運転席があってその横の底部に穴が開けられていた。この穴に丸太棒を差し込んで、レールを軋ませてブレーキをかける仕組だった。原始的ではあるが毎日作業に使ってわけだからそれなりに理に叶っていたのだろう。

きこり風の人と我々四人、学生三人が先頭の箱に乗って出発した。天気は良いし絶景の中だし、こんな滅多に乗ることがないであろう箱車の中で若い七人の気持ちは高揚していた。頬を撫でる風が何とも気持ち良い。

ここまでは良かったのだが、途中休憩したところで、学生の一人が「オジさん、僕にも運転やらせてよ」と申し出た。人の良さそうなこの人が「オウ、やってみるかい」と簡単な手解きで交替したのがイケなかった。少しの間は、うまく操っていたのだが急勾配に差しかかって、チカラを入れ過ぎたのだろう。何と丸太棒がボキッと音を立てて折れてしまったのである。ブレーキを失って箱車は見るまにグングン加速する。飛び降りるしか助かる方法がない状態なのだが、右側は絶壁の岩、左側は崖、そして深い谷、場所がない。オジさんも青くなって号令を発した。「全員、荷物を捨てろ！飛び降りる用意をしろ！」その間も箱車は益々スピードを増す。何十秒があっただろうか、右手前方にわずかな草ムラが見えた。「ここだ！跳べ！」。全員が一斉にダイブした。空になった箱車は50mくらいを走って横転し谷へ転げ落ちて行った。

幸い、学生の一人が足の脛を強打して歩けなくなった他は重傷者は居なかったが全員が体のどこかには打撲があって、あちこちにスリ傷があった。後続の箱車に分乗して下山したわけだが、そのまま町の診療所へ連れて行かれた。警察官、営林署の人、役場の人は来るわで大変だった。翌日は帰る日だったのだが、荷物を山の中へ放り投げてしまっていたからそうもいかない。営林署関係の人たちが「アンタたちは今日はゆっくり休んでいなさい」と言って探しに行ってくれた。リュックは見つかって返って来たが四人それぞれが持っていたカメラは一台しか見つからなかった。

旅館のおカミさんが「これは私からの御見舞い」と言って、また、見事な伊勢海老食膳に出してくれた。誰かが言い出して「命拾いしたのだから、帰りはせめて鹿児島まで飛行機に乗ろう。給料日だってすぐじゃないか」

これが私の人生初の飛行機搭乗体験になった。いまでは懐かしい思い出である。

あんなこと こんなこと

今年は天候不順で体調の維持、管理が難しいですね。夏風邪をひいたら若い時は2～3日で治ったものが一週間から十日くらいかかる年齢になりました。健康の維持で大切なものは、私は心のバランスではないかと思います。何かにチャレンジして前向きの時は経験的にあまり病気しなかったように思います。

山口百恵さんの歌『いい日旅立ち』の歌詞の中にある“日本のどこかに私を待っている人がいる”という気持ち、これこそが大事ではないかとしみじみ感じます。

臼井　敏彦